

【福島大学むらの大学アーカイブ 1】【川内 Chapter 1】

『かわうちへ迎える会』を設立し、  
川内村への帰還を待ち続けた元川内村役場職員

秋元洋子さん



インタビュー日時：2023年10月25日

インタビュー場所：川内村立川内小中学園

聞き手：青山奈那美、島榛花、星心、三浦雪乃、森崎遼大、久保田彩乃

### プロフィール

1951（昭和26）年、1月24日生まれ（インタビュー時72歳）。高校卒業時まで川内村で過ごし、高校卒業とともに上京。3年後に川内村に戻り結婚し、川内村では役場職員となり定年まで勤務。退職された2011年の6月に『かわうちへ迎える会』を立ち上げ、翌年2012年3月まで運営した。元川内村婦人会会長。

## 1. 震災前の生活

—先にプロフィールのご確認からさせていただきたいと思うんですけども、大変失礼なのですが、生年月日と現在のご年齢を教えてくださいませんか。

秋元：はい。昭和 26 年 1 月 24 日。72 歳になりました。ずいぶん頑張ってきました（笑）。この震災前は役場の職員で、60 歳で退職して、このかわうちへ迎える会に、みんな避難してるとき、これの会長をやって、役場戻ってきて、今度は婦人会長、前婦人会長で、現在に至ってます。会長はまた別な人になりましたけどね。で、天野和彦先生（福島大学特任教授）たちと一緒に、今はコミュニティーとか、そういうものを活動しております。

—川内村婦人会。

秋元：はい、会長。

—それは震災後なんですね。

秋元：震災後。

—戻ってこられてからってことですか。

秋元：そうです。

—帰還後。

秋元：そう。まあ一年間は、これ（かわうちへ迎える会）やってたけどね。避難してるとき、みんなビッグパレットに行ってたからね。

—いらっしゃったんですね、じゃあ。ビッグパレットに。

秋元：いや、仕事してました、少しは。

—その中で。

秋元：退職まで。

—そうか、そうか。

秋元：3 月 31 日で退職だったから。3 月 11 日に地震でしょ。だから 3 週間ぐらいはビッグパレットで。

—一定年の年だったんだ。

秋元：そうなんですよ。もう……。

—思い出深いですね、それね。

秋元：そうなの。だから忘れられない、震災の、これ。

—そうか。あらららら。ってこと、ご出身っていうか、生まれも育ちも……。

秋元：川内村。

—川内。

秋元：まあ都会に出たのは3年ぐらいで、あとはもう帰って……。

—高校卒業後とかですか。

秋元：そうです。東京に行って。あとはもう帰って来て、ずっと川内です。結婚しても川内で、ずっと。

—3年東京にいて、戻ってこようと思ったのは、何かあったんですか。

秋元：うちの主人がね、川内だったから。で、お父さんが亡くなったということ。

—じゃあご結婚して……。

秋元：結婚するんだね、まあ結婚ちょっと前かな。じゃあもう戻ろうっちゅうことで、戻ってきて。

—ご結婚されたのはおいくつ、覚えていらっしゃる限りで、結婚が。

秋元：まあ早かった、21歳。

—21歳。21歳でご結婚されて、旦那さまのお父さんが亡くなられて、戻ろうかっていって。

秋元：そうそうそう。

—ご夫婦で戻ってこられた。

秋元：そうそうそう。

—こちらに戻ってこられてから、もうずっと役場職員ですか。

秋元：戻ってきてからは役場職員。年齢だと28だか、7だか、まあそんなね。忘れちゃったね、もう。

—お子さんを育てながらも、お仕事も続けてってという感じで。

秋元：そうです。当時はまあ保育所勤務だったんで、保育所にずっといて、48歳で、少子高齢化で、役場の庁内に戻ったんですね、私だけ。それから、最後は住民課で終わったんです。

—震災の年は住民課にいたと。

秋元：そうそうそうそう。

—ご家族構成で、旦那さまとお子さんは……。

秋元：震災後、うちで亡くなったのは8年前。で、母親が、義理の母ね。

—あ、旦那さまの。

秋元：旦那の。亡くなったのが、6年前。だから今、娘と二人で。

－娘さん一人と、洋子さんでお住まいになってる。

秋元：はい。

－旦那さまが、じゃあ8年前に。

秋元：亡くなって。自営業だったんですよ。塗装業だったんですけど。震災後は川内でも除染の仕事場とね、除染をやってました。ヘルメットかぶって、私も……。

－そうか、そうか、こうやったりできるんだ、塗装業の方のお仕事……。

秋元：うん。まあそれなりにみんなね、人を集めて回ったな。最高で25名ぐらいいたか。集めてね。

－塗装業の自営業っていうのは、旦那さまの、例えばお父さんの代からとか、昔からやって。

秋元：うちの旦那から。

－川内に戻ってこられてから始められたってことですね。

秋元：そうそう。そうです。

－そうするとじゃあ、震災ちょっと前の、事故前の話をお伺いしたいんですけども、娘さんと旦那さんとお暮らしになりながら、役場職員と塗装業の仕事をされて、娘さんもずっと川内で。

秋元：いやいやいや。娘はね、岩手のほう。学校(大学)が仙台だったから。岩手のほうに就職して、で、震災の2年前ぐらいか、戻ってきて、川内に。そして川内にいたところに震災になっちゃって。そして今度、娘の父親が病気、がんになっちゃって、今度2年後に、今度はおばあちゃんがね、もう99歳まで生きてましたけどね。全部自分で、だから娘が見て。で、私はもう、除染の仕事でいつもこう行ったり来たり、もう働いてたからね。全部娘に任せてやってたんだ。

－震災前の住民課での洋子さんのお仕事っていうと、やっぱりあれですよ、住民台帳とか、戸籍の管理とか。

秋元：私は戸籍、あれだね、年金と。年金担当をしてたんですね。まあ戸籍でも何でもね、もうやんなきゃなんないけども、まあ主に年金を担当して。

## **2. 震災当時の状況**

### **★被災の翌日、避難者への炊き出し**

－震災の当日のことなんですけども、3月11日の2時46分ですよ。どこで何をしていたのか教えてくださいいただけますか。

秋元：それなんです。まさか震災くっと思わないから。だから当日は、午後から時間休を取って、原町

の合同庁舎に行くわけだったの。これはうちのほうの、自宅のほうの用事で。私も、ほら、事務みたいなもんをやりながら、仕事をしてたからね。まあ自宅では、色々こまいものやっていたから。で、合同庁舎に用事があって、時間休を取って行ったときに富岡町の、川内から行くと最後のトンネル、あるんですよ。富岡町に入る、最後のトンネル。そこに長い橋があるんですね。長い橋。その橋の真ん中で揺れが来たの。

—怖い。

秋元：うん。で、何だこれはっていう感じで、そこで止まって。それでも、もうせっかく時間休取ったから、行かなくちゃなんないと思って、双葉町まで行ったの。で、双葉町まで行ったんだけど、もう途中はもう噴水みたいに、道路がら水が湧きでてまったりして。えー、どうすっかなーと思って。で、双葉町まで行ったんだけど、向こうの鉄橋の橋桁がバターンと落っこって、うそーっと思って、そこから今度引き返してきたんですよ。役場には戻らないで、そのまま自宅に戻って。自宅でも、わー、何だかんだないよね。それで家の片付けやって役場には戻らなかったの。

で、次の日に朝行ったら、富岡町の人らも今から避難してくるよと言われて、もう自分の仕事なんて心配とかじゃないんだ。やっぱりこれは女性としての使命なんだかも分かんないけど、炊き出し、っていうことでね。まあ職員としても、いや、庁内のは、まあ本当に5、6人だったからね、少なかったから、もう炊き出しだ、という感じで、すぐに。課長命令でもなんでもないので。もう自分なりにバツと、教育委員会の厨房あるんですよ、あそこに。釜、二つだけあんだけど、そこに行って炊き出しの準備をやってたんですね。もう何が何だか分かんなかったの。もう東電が爆発するっっちゃうだけで。

—原発が爆発するのは知ってたんですか。

秋元：東電が爆発するっていうことで、富岡の人が来るよっていうことは知ってた。でも爆発って、どの程度の爆発だかも分かんないし。本当に勉強不足だった。爆発って(聞いて)、バーンとこっちのほうまでくっと思ったの、川内のほうまで。これ勉強不足だ、恥ずかしいけどね。そうしたら、ああいう感じだったんだけど、まあ大変なことだったけどね。川内どころじゃない、それこそバーッとね、もう。

—震災の前って、川内にお住まいで、原発のことを考えるようなことってありましたか？

秋元：そういう危機的なことは考えなかったね。うちでも東電の仕事ももらってて、塗装とかやってたものだから、すごいやっぱり恩恵があるんですよ。子育て最中にね、そういう関係、恩恵のある会社だったもんで、東電は。だから、まさか、だったんですね。

—沿岸部の、まあ大熊とか双葉とか、あっちのほうの方の子たちって社会科見学で原発を見にいったりとか、あったじゃないですか。

秋元：はいはい。うん。

—川内って、そういうのはあったんですか。

秋元：うーんとね、そういうのは、私が役場にいる間、婦人会の人らは、たぶん行ってましたね。でも、私は勤めてたから、そういうのにはあんまり関わらなかったんだけど。

—じゃあやっぱりこう、安全なものというか、まさか事故が起きるなんてって思いもしない……。

秋元：思わなかった。本当にね。

—津波のことはどうですか。まあ山あいだから、ここに来るっていう考えはもちろんないにしても、双葉に当日いらして、津波のことってよぎりました？

秋元：まさかだったね、それも。あんまりそういうね、水っていうか、海とか近くないし、テレビでよくね、岩手県のどこどこに津波が発生しましたよとか、して何人亡くなりましたよ、なんて聞くんだけど、まさか富岡町、そのへんの浜通りのね、ところで、浜のほうで、津波が来てどうだって、そこも考えなかったんですね。

まあ、幸せっていえば幸せだったんだけど。いま考えると本当に。この10年の中に双葉郡の交流会とかね、婦人会があったんですけど、川内はもう、そういう被害は、そういう津波で亡くなったとかはなかったから幸いだったんですけども、そんな気持ちも本当に分かんない中でいろいろ婦人会長として、皆さんが浜通りから、8カ所もそこから集まって川内村で交流会、初めてやったんですね、震災後。120名ぐらい来たんですけど。もう、この人たち、どんな思いでいたかって、あとになって考えると、何とっていいか分かんなかった。どんな思いでいたんだろうなって。

当日はね、村長さんの講話とか、これ、27、28年かにそういう交流会やったんだけど。そのとき、村長さんの講話、あとは川内の舞扇会という踊りの人たちの踊りを披露してもらったり、お弁当をみんなで食べたりして、みんなにぎやかに、楽しかった—って帰ったんですけど。はあ、自分たちと同じ気持ちじゃないんだろうなって、ずっとあとから考えて。どんな気持ちでいたのかなと、本当にあとになってつらかったですね。

—どういうところで、自分たちと違うんだなっていうのを感じたんですか。

秋元：やっぱりほら、津波がね、来てね、今日までいた人が亡くなり、一緒にいた人が亡くなっちゃったり、そういう津波の関係で、辛い思いをしましたよね。あとは、うちが流されたりした人も、たぶんいたと思うんで。

川内はそういうことはなかったから、地震で揺れがあって、ゴチャゴチャしたけども。まあそういう点で、はあ、と思った。本当に。

—震災当日の話に少しお話を戻しますが、当日から翌日にかけて富岡の人たちが来るとなって、炊き出しを始めた。何日間ぐらい。

秋元：16日の朝まで。

—毎食分というか……。

秋元：朝昼晩なんだけど、来た日は、とにかく夕方しか、もう食べさせることできなかったの。その夕方、おにぎり一個ね、おにぎり、冷たいよ、もうはあ、朝から作ったのが夕方なんだから。

—寒かったし。

秋元：おにぎり一個と、あとほら農家の人らが、やっぱり防災無線で、ほらな何かあったら持ってきてくださいなっていう防災無線。野菜とか持ってきて、それでみそ汁を煮たの。

で、ずっと、コミセン(コミュニティーセンター)のあの玄関前にさ、机置いて、おにぎりとおみそ汁おいて、みんなこう並ぶんですけど、まああの寒さの中、みんな並んでおにぎり一個もらってね、帰るのね。帰るっていうか、その部屋に入るんだけど。

そうずっと、子どもの分まで何個って言われんの。いや、でもみんな並んで(いるから)、子どもの(分のおにぎり)はすいません、最後にまた並んで来てくださって言って、(その人には)つらい思いさせた。

ほんで、一個ずつ、結局は間に合わなくて、間に合わなかった人にはみそ汁。それもタップタブじゃないんだよ。いっぱいじゃないんだよ。半分ぐらいおわんに。それを食べて一夜を過ごしたんだ、みんな。

いやー、でも、コミセンばかりじゃないからね、もうこれ(この状況)は。小学校にも 1400 人ぐらい、みんな廊下から何からいたし、各集会所、温泉いわなの郷、あとは中学校の体育館と、高校の体育館と。高校もあったからね、そのときは。そういうところに、全部(炊き出しを)やんなきゃなんないわけ。

で、まあ、各集会所は各支部の婦人会の人たちが、みんな自分らでおふかしを作ったりしてやってくれたんだけど、そのほかの公共的なところにいる人は、みんな私たちが作って、もう持っていかなきゃなんないわけね。

でも自衛隊さんが毎日 500 個ぐらいずつ(おにぎりを)届けてくれたの。で、自衛隊さんの分は取っておいて、次の日の朝、500 じゃ足んねえけどなあ、何千人って来てるんだから。まあ、次の日の朝に回そうっていうことで、それを。冷たいわなあ。本当にそういう思いしてたんだよ、富岡の人ら。

—それでも、早い人だと、もう 12 日とか、もう 13 日ぐらいには、川内すらも出ていかれる方が多かったと思うんですね。

秋元：そうそうそう、うんうん。

### ★避難民受け入れ側から自分たちも避難民に

—ご自身も、避難をしなればいけないってなったのは、いつ……。

秋元：16 日の朝。避難してる人もいっから、その炊き出しは最後まで、職員だしね、ずっとやってたわね。で、16 日の朝、通常通り役場に出勤したら東電が爆発するって、またなって。で、もう女性職員は、そのときには 2 名ぐらいだったから、女性職員は、うちに帰って避難の準備して、なんて言われて帰ったんだけど。男の人らはスクールバスでビッグパレットまで富岡の人と川内の人、運んだからね、残ったんだけど。

私ももう一人の人は、うちに帰って。寒いことだけは分かってたから布団と毛布だけ車に積んだ。もうあったいの(暖かいの)あれば大丈夫だと思って。

それで、私らも一回、ビッグパレットに行ったんだけど。

—旦那さんと娘さん？

秋元：と、ばあちゃんに行ったんだけど、浪江に嫁いだ娘が、福島の方にアパート借りたよっちゅうことで、ばあちゃんはもう 90 歳過ぎてるし、じゃあみんな向こうに行くっていうことで、私はビッグパレットで、31 日までは、やっぱり仕事。

－3月31日まで、じゃあビッグパレットに寝泊まりしながらですか。

秋元：女性は女性（で寝泊まりして）。最初はビッグパレットのこう、通路みてえなとこに寝てただけど、最後の1週間ぐらいは、もうみんな落ち着いてきて、川内村役場が近くにアパート借りてくれて、女性5人ぐらいで、横になっていたけどね。

－定年までの20日間ぐらいは、どういう仕事をしてたんですか。

秋元：私はラーメンとかそういうの食べたい人にお湯を沸かして、並んだ人に渡してた。みんなそれぞれ、いろんな分野で（活動していた）。住民課とかだから、住民課の仕事とか全然関係なかった。

－定年の日ってというのは、どんなお気持ちでしたか。

秋元：定年の日は、もう本当に避難してから、本当に20日ぐらいだったから、まわりもマスクして。個室にみんな職員が集まって、村長さんからそういうお祝いの言葉をいただいて、それで花束をいただいて、避難先に私は帰ったの。

－娘さんが借りたアパート。

秋元：そう。向こうに帰って。で、自営業（塗装業）だったから、仕事始まるよってということで、4月の末には（川内村に）戻ってきました。

もう退職したらコーヒー豆を擦ってコーヒーを飲みながら、一日を、もう何すつかボーッと考えて（過ごそう）、って思っていたわけね。そうしたらもう、そんなのじゃなかった。そして1泊で、送別会をやるわけです。（震災のせいで）それもないわよね。

6月ごろかな。ビッグパレットのそばの店一食堂みたいな。そこで、住民課の人らの退職（送別会）をやってもらったの。

－居酒屋のような。

秋元：居酒屋。だから、この震災は忘れるつつたつて忘れらんねえ震災だったよね。そんな思いで過ごしました。

### 3. 川内村に戻ってから

★洋子さんは一足先に川内村に帰還した

－4月末に戻ってきてからはどのように過ごされていたのですか。

秋元：まあ思い描いていた退職後の生活ではなくなっただけです。4月から戻ってきて、同級生が、スタンドやってた同級生いるもんだから、その人と毎日困ったなって言って。どうしたらいいんだべって。私はほら、職場辞めたばかりだったから、みんなビッグパレットで世話してる状況が頭から離れない。「こんなボーッとしてらんね、みんな頑張ってた」つつって、「いや、何かやんなきゃなんねえ」つつうことで、これ、6月に立ち上げた。

—かわうちへ迎える会ですね。

秋元：6月22日に立ち上げたの。当時39名集まって、60歳から70歳ぐらいの人だな。避難先を行ったり来たりしてる人なんだけど、動物がいたり、エサをやりにきたり。あと、ばあちゃんがいつから、そこにいたきりではなんなくて、来たりまったりする人らが集まって。

## ★かわうちへ迎える会について

—何をやる会なのでしょうか。

秋元：かわうちへ迎える会っていうのは、川内村が、とにかく戻ってくるまで明かりをともしようということ、かわうちへ迎える会っていう名前で、まあコミュニケーションづくりだよ。

商工会長の井出茂さんが、当時温泉のそばの「あれこれ市場」、閉店だったでしょう。あそこを使ってもいいよっていうことで、そこを拠点としてみんな迎えようということになって。

ここにも看板を作らなきゃなっていうことで、「名前はどする？」って言ったら、当時ひまわりの花がね、もうきれいでいっぱいだったのね。

だから、ひまわりのように、前に向かって進もうということで、『絆のひろば、ひまわり』っていう、看板を作って、それを朝出して、また夕方帰るときにはそれをしまっっていう感じで、当時2名ずつ常備して、みんなが帰ってきたときにお話する場所として設けていたのね。

まんじゅう作りのお菓子屋さんもいたから、まんじゅうを手作りで習って作ったり、キュウリを漬けたりして、みんな帰ってきたとき、「はい、お茶飲め」つつって、お茶を飲ませて、避難先のこととか、または置いてった動物のこととか（を話した）ね。

あとは富岡町のほうへ帰る人がここを通るんですよ。その人たちが、明かりついて、「あれ、いたのかい」、なんて回って。で、私らも青いTシャツを着てやってたから、ホッとしたんでしょうね。

—そうやって、電気、明かりをつけておいて、誰でも立ち寄れる場所に、ということですね。

秋元：そう。1カ月ぐらい。毎月今度活動しようっていうことになって、じゃあ6月に花植えやろうって決まった。役場周辺に、サルビアとか、ああいう花を植えて。そこを通ったみんなが、きれいだなって思う、癒やされるような感じで花も植えよう。7月には七夕飾りを作ってね。

それで当時、8カ町村（被災12市町村のうちの8カ所）の消防職員の人たちが、川内村のコミュニティ

—センターを拠点として、そこで寝泊まりしてたの。他さ（他の場所には）入れないから。

秋元：で、何か浜（海沿い）のほうであると、川内から出動してたの。

—村長の帰村宣言って、12年の1月でしたよね。

秋元：そう、12年の4月から。

—ということは、2011年の、洋子さんが戻ってこられて1年間ぐらいというのは、いわゆる、戻るか戻らないかは自己判断だけど、なるべく戻ってほしくはない、というような時期だったと。

秋元：そういう状態の中にいるから、村が戻ってくるってなって、（絆の広場、ひまわりの）閉店、3月にしたんだけど、安堵だったね、もう。

－放射能の問題のその不安とかは、全然なかったですか。

秋元：一応、川内はまあ、そんなにね、放射能つつたって、ないよって聞いてたし、だからそのために、9月には放射能の勉強会を開いて。10月だったかな、放射能汚染と食についての勉強をして、食べ物はどういう食べ物が食べられないかとか、あと食べ物、例えば大根だったら、大根の上の方は駄目よとか、茎は放射能があるよとか、そういうのを除いて、じゃあ食べれば大丈夫だねとか、勉強会開いたの。で、みんな、やっぱりそれなりに、ああタケノコの上の方には放射能がつくんだってとか、そういう感じでみんな気を付けてね。そういう感じで食べてたから、安心はしてたんだ。

－そうなんですね。

秋元：そう。だから、1月に帰還宣言するまではずっと活動をしてたんですよ。

その間、地震で富岡のほうへ行く道が寸断されちゃってね、通れないっていうことだったから、これから避難でビッグパレットに行く方が多いんで、自衛隊の大滝根駐屯所の近くを通っから、その辺りのゴミ拾いをしようということで、7月ごろ、ゴミ拾いをしたのね。

仙台の荒浜地区で7月にかわうちへ迎える会のメンバーが行って、植樹祭を手伝ったり。川内村でも9月には、川内の、『いのちの森づくりリレー』っていうのを、グラウンドの上の自然公園、高山自然公園で植樹祭したんです。

そんなとき、900本ぐらい、苗木を植えたんですけども、その荒浜地区の輪王寺っていうお寺のお坊さん含めて、5名ぐらいは川内に手伝いに来てくれました。

いや、うれしかったね、やっぱり。絆ってこういうことなのかなって、いろいろ勉強させられた。

11月ごろからは、じゃあ今度は通院、通学、学校の格差なくすようにとか、買い物も便利になるようになっていうことで、国道399号線、細い山道なので整備してもらっていうことで、署名活動やったのね。冬の寒い中、郡山の仮設住宅、一軒一軒回ったりして、川内の当時の人口3000名ぐらい集まったから、今度、元法務大臣の岩城光英先生とか、村長さん、商工会長さん、あとかわうちへ迎える会のメンバーで、県の土木事務所に、署名を提出したんですけど。それでできたのが、戸渡トンネルと十文字トンネルね。あと3月17日に、川内村主催で、がんばっぺ川内復興祭っていう、復興祭があったのね。温泉でやったの。

－2012年の。

秋元：12年の3月17日。4月からは村が戻るから、今度は婦人会として頑張んなきゃなんないんで、復興祭に、一緒にかわうちへ迎える会も参加して、協力して手伝って、閉店しようということになって、かわうちへ迎える会は終了したんです。

だから、帰ってきてからも役場の人たち、もう少しやっててくれればいいのになって言うんだけど、メンバーみんな、大体婦人会のメンバーなんだわね。

だからどっちみち、4月から婦人会としてみんな集まって協力しなきゃなんないからっていうことで、終わったんです。

## ★川内村の魅力とは

－秋元さんにとっての川内村の魅力を教えてくださいませんか。

秋元：ああ、川内村の魅力。やっぱり川内は、自然が魅力なんだけど、このか細いこの田園地帯ね、本当に春は緑色に染められて、夏はこの黄金色に染められて、この自然が魅力なんだけど、その中の、キノコね。その財産が失われたっていうことは、この川内に住んでて、損失だな。本当に、この震災になって、思うようになった。

震災前は、食べるのも当たり前、採るのも当たり前。だから何とも思わなかったの。でも、この震災で食べられなくなってから、やっぱりほら、いっぱい採る人は売ったりするよね。そういう経済的な面もそうだし、あのキノコうまかったのに、もう食べらんねえっていうのも、ああ、そうか、キノコって財産だったんだなって。

－震災前って、キノコ、自分で採ったりしてたんですか。

秋元：自分で採ったりもしてました。私はあんまり興味はなかったんだけど、でも、食べたりもらったりしてて。それが本当に財産だかっていうのが、震災後、分かったね。だから、それで経済を回してた人も。

－いや、本当ですね。

秋元：全然もうね、今は採れたってお金にならない。だから、大変なんだなって。本当に恵みだったね。

－今は、自分たちで採って食べたりするのは、している人はいるって感じ？

秋元：いるよ。

－いる。売ることはないけど。

秋元：ないない。あげたりはしてっけども、売れないわね。食べるほうも、若い人はそんな食べないから、食べるのは年寄りばかりだわね。

－学生たちはちょうど世代的にね、親御さんとかがね、一番食べさせないで来たかもしれないね、福島のものに気を使ったりとかね。でも、もったいないですよ。

秋元：もったいないよ。

－おいしいのにね。

秋元：そう。その一つの魅力は、なくなっちゃったけど、今は、それはそれでしょうがないけど、やっぱりこの自然豊かな川内村、水がおいしくて、空がきれいで、山がね、これから紅葉していく。そういうのが、魅力だな、やっぱり。

それにプラス、川内村にはすごい宝物がいっぱいあるっていう、かわうちラボで一生懸命やってくれた宝物。それがいっぱいあるんですよ。

その川内村ならではの魅力を、観光資源として、いろんなところを組み合わせ、いわなの郷に来たら、じゃあここの館で、その宝の山、あるよね。そこに連れてったりとか、こう組み合わせによって、観光資

源としたらいいんじゃないかなあって。

そこは魅力だなんて思う、やっぱり。自然ばかりもあれだけど。

—観光資源がいっぱいあるってこと。

秋元：いっぱいあるってこと。だから、他から来た人ね、ただいわなの郷に行って、はい、魚釣りしました、はい、食べました。それに加えて、こういうところあるよっていう、チラシなどを配って、そういうツアー

—みたいなのをやったら最高だなんて思うね。

こんなに魅力があったんだなんていうことを考えるようになった。

—川内の方とお話をしてたりして、他の双葉郡との違いを感じる事がすごくあるんですけど。というのは、その場所とかものとかの魅力っていうのはもちろんなんですけど、それを住民の人たちが面白がって、いいじゃん、やろうよみたいな、アイデアというか、なんでもイベント化するみたいな、なんでも観光に結び付けるとか、その行動力だったりアイデアだったりっていうのが、何か川内村って独特にそういうのがあるのかなって感じたりしてたんですけど、住民として何か、中で動いていて、感じる事ってありますか。

秋元：うん、やっぱり確かにそれはね、やろうっていう感じで、さらに奥深く、魅力的な、そういう宝、文化のもの？ 財があったんだなんていうことを、最近になって考えて。

ああ、これやっぱり観光資源として、何かこう取り組んだらいいんじゃないかなって、そんなふうに思うようになった。

—やっぱりこう、やってみようっていうような気持ちなんですかね、皆さんね。

秋元：そうそう。だから、教育委員会の公民館、生涯学習課のほうにも、せっかくラボで作ってくれた宝物があんだから、これを生涯学習課のほうで、ツアーを組んでね、1カ月に1回の講習じゃない、教育みたいなのをやったらどうだっていうようなことも言ったんだけど。人も足りないし、なかなか大変だと思うんだけど、あれはあのままにしておいたでは、地元の人も、本当に行かないところが出てくると思う。だから、何とかしてもらえたらと思うね。

やっぱり、そういう魅力的なところが、さらに出てきたっちゃうところだね。私の考えの中では。

—ツアーを組むことで、その観光の方だけじゃなくて、自分たちも魅力を見つけられるんですね。

秋元：そう。川内で生まれて、川内で育って、こんなにいろんなところがあったんだって思うようになった、あのかわうちラボさんが、一生懸命頑張って、やってくれたのを見て、本当にそう感じた。それをそのまましまっておくんじゃないかって、どこかに観光資源として出したらいいんじゃないかなって。

★秋元さんの考える「復興」とこれからの川内村について

—貴重なお話、ありがとうございます。じゃあ、これからのことについて、少しお聞きしたいんですけど、秋元さんが考えている復興っていう言葉の意味をお聞きしたいのと、どのような川内村を目指しているのか、こんな川内村になってほしいって いう想像みたいなことがあれば、教えてください。

秋元：うん、復興っていう、本当に復興っていう言葉は、忘れられない、これ、一生忘れられないんじゃないかなって。忘れることはできないんじゃないかなと思うのは、本当に田園地帯が、こう、この辺は太陽光パネルで埋め尽くしてないけど、川内村の中でも、もう田んぼ、畑に太陽光パネルが、びーっちり並んでね。ああいうのを見ると、復興っていう言葉は、忘れることはできないなって思うのね。

だからまあ、役場自体では、色んなことでね、前に向かって進んで、いろいろやってくれてっから、もう本当に、大体当たり前の生活に戻ってはきてっけども、そういう状況を見ると、復興っていう言葉は、もう一生忘れることはできないな。常に復興なんだなと思っちゃうね、本当に。で、自分らのこれからの、まあ取り組みっていうか、これ、今後、どうしたらいいのかなっていうことは、やっぱり、ほら今、温暖化時代っていうのも通り過ぎて、沸騰時代って言われてるでしょう。今年あたりはこの暑さで、本当にもう、農作物もあんまりなかなか上手くできなかった、米もなかなかね、一等米がなかなか出ないよとか、野菜ものもね、そうなんだけど。

まあそういう、どんなことがね、あるか分かんない時代になってきてるんで、やっぱりこの東日本震災で経験した、この防災関係、自分らでこう、そういう危機を感じたり、経験したことを風化させないように、こう、誰かに会ったら、いや大変だったね、いやこうだったねって、風化させないように、何ていうのかな、指導ではないけども、話をしながら、常に自分たちも防災の備えをして、生きていかなければなんないのかな。

だから、これからはこう、どこで行き会っても、地震がなったときはこうだよな、ああだよなって言いながら、みんなもその備えしてもらって、備えをしなきゃ駄目なんだよっていうことを、これからやっぱりこう、教えるような感じでいくのが使命かなあなんて、そんなふうに思います。

—震災で経験した活動とか、そういうのを、これからの人たちに伝えていくっていうことですよな。

秋元：そうですね、はい。全てね。で、この話も、福大生、去年はあれだけど、その前の年3年ぐらいは、この話、全部やってますよ、30人ぐらい、みんな来たときに。いわなの郷とか、そういうところでね。で、ほら、私らもこんな、震災ってね、本当に自然災害がおこると思わなかったから、まして、じゃあそのとき何をやるかなんて、誰にも教えてもらえないしね。

今考えると、よくあんなことやったよなああと、みんなで集まって言うけど。誰も言ってくれねえのに、よくあんなことしていたよなあとか（笑）。

じゃあもう、これを作って残しておこうっていうことで、まあおしゃべりはしないけど、もう活動状況が、ああ、こういうのやったんだっていうのが入ってるのね。

## ★震災から12年を振り返って

—洋子さんにとって、この12年って早かったですか。

秋元：いや、いま考えると早かったね。婦人会長やりながら、これやって、今度、自宅のっちゅうか、会社の除染、もうヘルメットかぶって、私も……。

—洋子さんもやったんですか。

秋元：いや、作業はやらないけど、ヘルメットかぶって現場回りしたりね。やってたから、まあ忙しかったね。よく、もう病気すんなよ、病気すんなよって、もう、たまに会う友達とか言われて（笑）。大丈夫

だっつって。うん、やってました。もうあつという間だった、だから。

本当に、震災という言葉は忘れられないなど。でも、本当に周りの田園地帯見ると、のどかになってね、今はね、もうあの震災が嘘かなって思うような状態になってきたけど、でもある一面、太陽光パネルに、埋め尽くされてるとこ見ると、やっぱりあつたんだな、忘れられないなっていう。

これからやっぱり、防災関係に力を置いて、自分もそうだけど、もうあの経験は無駄にしないように、風化させないように、教えていくのがこれからなんだなって。

—大事ですね。

秋元：だよ。はあ、まあそういうことだったんです。もし何かあったらまた聞いてください。

—話がだいぶ前に戻っちゃうんですけど、炊き出しされてたときって、何時から何時ぐらいまで、こう……。

秋元：勤務時間？

—はい、炊き出しする時間って、どのくらいだったんですか。夜とかもやってたんですか。

秋元：夜は夕飯作って、夜はいつも帰るのは夜の8時ごろだったの、自宅に帰るの。一応ほら、夕飯を作って、みんなにこう、配るでしょ。その後、今度、6時ごろから、役場の2階で、ざっともう、なんつうのかな、今日の一日に対してのこととか、そういうものを、8時までやったの。で、やっぱり若い人が葛藤してね、やっぱりほら、子ども連れて、やっぱり自分らも行きたいよね、もう避難して。でも、それ、行けないとか、まあそういうので、こうね、いろいろこう、あつて、8時ごろまで毎日やってた。でもみんな、風呂にも入れないしね。大変だったよ。

富岡町の役場の女の人がね、ちょうどそのとき赤ん坊生まれて、1カ月か2カ月の赤ん坊をね、姑さんに頼んできたんだって。もう心配だって、厨房に手伝いに来てね。大丈夫だよ、ばあちゃん、ちゃんと見てっから大丈夫だよって言って、ああ、そうかなあなんて。

平成28年の3月か、その人が、もう子どもが何歳ですって、ほれ、連れてきて、花束持ってきて、あの厨房でね、教育委員会の厨房で、花束もらったの。

でも当時の婦人会長っていうのは別な人だったから、その人にね、その花束を持ってってやったんだけど。ちゃんとお礼に来てくれたね、職員の方が。

いや、あんな思いさせちゃったねっていうことで、自分なりにやっぱりそんな思いで、この花束もらったなあっていうね。大変だったと思うよ、富岡の人ら、本当。食べ物も。

ほんで、ほら、やっぱりお金、みんな持ってきちゃったけど、川内のほうね、商店街、食べ物みんな、はあ、その日にないわよなあ、全部ね。だから、本当にもう出されたものしか食べれなかったの。かわいそうだった。

でもあれがどうってね、みんな言ってくれてっけど、まあお互いに無我夢中だったからね。

—そうですよね、あのときはね。

秋元：うん。

—元々、富岡と川内って生活圏が一緒に、川内の方も富岡に買い物行ったりしていた…。

秋元：行ってる、はいはい。

－知り合いの方もいっぱい…。

秋元：まあね、知り合いっていうか、うん、まあ……。

－友達とか。

秋元：友達って、あんまり若い人はいなかったけど、まあ何ていうの、親戚？親戚の方も来て泊まったりしたけど、だからその人に、自分らで、家族で作ったおにぎりとか持って行ってやりたい思っても、周りが出て、そんなこともできなかつたしね。もう知らない振りだった、本当に。だから、そういう思いで過ごしたね。

#### 4. これからの世代に伝えたいこと

－これからどんどん、その震災のこととか、知らない世代の人たち、若い人たち、増えていくじゃないですか。

秋元：そうですね。

－そういう、学生も含めた子どもたちに何を伝えたいですか。震災の教訓というか。

秋元：うーん。震災の教訓ってね、うーん。まあだから、やっぱり防災がなと思うな。これからは戦争くっかも分かんないし、本当に何くっかも、ね、突拍子のないことが出てきたときのことを考えて、自分なりの防災を意識しながら、自分なりに備えておいてもらったほうがいいのかなと思うな。

何も分かんないまま、我々は東日本大震災を迎えてしまったけどね。原発事故とかね。だから、そういうのを自分なりに意識しながら、防災を備えなければなんないのかなと。

－ありがとうございます。1時間、あっという間に過ぎてしまっ。

秋元：いやいや、かえって、ありがとうございました。

#### **【学生の感想】**

洋子さんへのインタビューを通して東日本大震災当時の炊き出しの様子やかわうちへ迎える会の活動などを初めて知ることができました。お話を聞いて、震災が起きてすぐに富岡町の住民のために炊き出しを行ったことなどからは川内村の村民の思いやりや繋がりを感じました。このインタビューやアーカイブ活動を通して記憶や記録を伝えることの大切さを学ぶことができたのではないかと思います。

行政政策学類1年 青山奈那美

この活動を通じて、私は活動に参加する前まで東日本震災を「他人事」のように感じていたなと思いました。実際にあったことであり、内陸部とはいえ自分自身も確かに被災していたはずなのに、インタビューを行うまで心のどこかでそう感じていました。言い換えれば、この活動で洋子さんの経験談や復興に対する想いを伺って、災害が地域に及ぼす影響や復興の在り方についてより現実に即して考えられるようになったと言えます。特に復興の在り方について、行政と地域住民の連携が必須であると考えられるようになりました。アーカイブ活動の一環であったこの全文インタビューは取材時の様子を想像しやすくするため、また秋元洋子さんが私たちに伝えてくださった震災当時や復興に対する想いをそのまま記録するために、多少修正を加えましたがほぼ原文となっています。この全文インタビューを通して、被災地の現実と復興について考えていただければと思います。

行政政策学類 1年 島榛花

東日本大震災が発生したとき、まだ小学校に入学する前で、当時は何が起こっているのかあまり理解できていませんでした。また、私は福島県出身ではないため、防災教育で東日本大震災について学びましたが、川内村の全村避難の経緯や、村役場の機能が再び川内村に戻るまでの住民の方の気持ちや行った活動、現在川内村が抱えている課題については、アーカイブ活動を行うまであまり知りませんでした。そのため、当時の状況を伺ったり、川内村の様子を見て課題について考えたりしたことは、非常に良い経験になりました。特に、震災当時の経験や感じていたことを、当事者の方から直接聞く機会はありませんので、お話を伺うことができ良かったです。アーカイブ活動を通して震災当時の人々が置かれた状況を知り、教訓や人々の想いを次の世代に繋げることの大切さを感じました。

行政政策学類 1年 星心

川内村民の中の一人に焦点を当て、直接その方自身の経験や生活、思いや考えを聞くことができ、非常に良い経験になりました。震災・原発事故に関連する記憶や経験は一人ひとり異なったものであると思いますが、一人に着目してその方の思いを伝えるということはなかなか難しいように感じます。インタビューを通して、秋元さんからは炊き出しやかわうちへ迎える会の設立など常に何かできることはないかを考えて行動されている印象を受け、川内村への思いも覗えました。なかなか知られることのない、こうした個人の思いや当時の記憶、活動を自分たちの手で発信できることに嬉しさを感じます。

行政政策学類 1年 三浦雪乃

今回、残念ながら秋元さんへのインタビューに行くことができませんでしたが、全文インタビューの原稿を読んで改めて東日本大震災の恐ろしさを知ることができました。震災当時、自分は千葉県に住んでおり、机の下でぬいぐるみを抱えて泣き叫ぶ弟とひびが入り真っ二つに裂けた家の壁を鮮明に覚えています。今回の活動を通して自分以上に被害を受けた方々が懸命に伝承していかうとする姿に心を打たれました。自身が体験したことやアーカイブ活動で得た教訓を今後の生活に役立てていこうと思います。

食農学類 1年 森崎遼大